2013.3

■ 初等教育と高等教育の「論理的思考力」
■ 2月のFD活動報告
■ スタッフからひとこと

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター

初等教育と高等教育の「論理的思考力」

何が論理的かは文化が決める

ある事象を説明する時，その説明のスタイルは文化によって様々であることがわかっています。文化によって，納得の構造が異なるためです。ある文化に所属する多くの人が納得できる説明スタイルは，そのままその文化が持つ論理構造であり，従って，国民教育として初等中等教育で教えられることになります。説明スタイルの分析には様々なアプローチが可能ですが，言語学や歴史叙述学などの分野では，出来事を語る順番の重要性が指摘されているそうです。順番を研究することは，その言語やジャンル特有の論理や価値観を明らかにすることであり，逆に，論理的でない，あるいはしっくりこない，と感じるのは，その言語や文化独特の思索の順番（sequence of thought）に従わなかった時であると考えられています。出来事と出来事のつながりをいかに枠づけるか，という構成が，説明に必要な要素や原因結果の特定の仕方を規定し，一連の出来事への感情の持ち方にまで影響を与える可能性があるのです。

今回は，歴史が日米の小学校で如何に教えられているかという研究をご紹介し，その成果が大学に与える示唆を考えてみたいと思います。

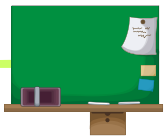
歴史の授業から見える文化的な理解の枠組み

渡辺（2003）は，日米の小学校の教室で，歴史がどの順番で教えられているかに注目して，日米の論理構造の違いを鮮やかに描き出しました。歴史を取り上げる理由として，渡辺は「時間の流れ」という要素と「因果関係」の観念の理解が重要であるからとしています。この二つの特徴は，相互に関連し，過去の出来事をいかに理解するかの方法を教え，それを応用することで未来を理解するための枠組みーひいては世界を理解する枠組みーをつくります。日本では，過去の出来事は時系列連鎖で語られ，「どのように」出来事が起こったかが問われ，様々な情報を取り込むことにより原因の特定は行わない傾向にあります。「どのように」物事が起こったのかを学べば，「なぜ」起きたのかは自然に理解できると受け止められており，「目標達成よりも目標達成に向かう態度や心構えに関心が向かう」（p.66）ことになります。一方でアメリカでは，過去の出来事は「逆向きの因果律」で語られ，「なぜ」特定の出来事が「結果として」起こったか，その原因が問われるというのです（pp.41-67）。

表：日米の小学校における歴史の授業の比較（渡辺，2003をもとに作成）

	日本	アメリカ
語られ方	時系列的連鎖	逆向きの因果律
説明に必要な要素	状況と過程（情報量多）	情報の選択（情報量少）
過去・未来の構造と因果関係	長い連鎖と心構え（結果や行動よりも過程の重視）	逆向き構造における結果重視と短い因果
求められる能力（評価の重点）	人間の普遍的な感情の理解と共感能力	自分にとって大切な目標を定め，判断し決断する能力

日米の歴史の授業の実際



渡辺（2003）で挙げられている実際の授業での模様を，ここに抜粋してまとめます。

＊日本の授業ーモンゴル襲来の授業

教諭：今言ってくれたように，日本の幕府はモンゴルの最初の使者を無視しました，そして次に使者を送ってきた時，どんな風にモンゴル人は感じたと思う？あなたたちも無視されたら頭に来るでしょう？（中略）自分たちはこんなに大きくて強い，そしてあなたたちはこんなに小さい。あなたたちだったらどう感じる？

児童：いばるな！

教諭：そう，いばるなって思うよね。モンゴル人がどんなに仲良くしようって言ったって，それは国交を持とうっていう意味だけど，モンゴルはこんなに大きな国だから，自然に日本を支配下に置こうって思うよね。

＊アメリカの授業(1)ー第二次世界大戦前後の社会の変化

教諭：第二次大戦後，女性の権利に対する多くの人々の考えが変わりました。これは結果です。原因は何でしょう？教科書を見て。これが結果でその原因は何でしょう？エリザベス。

児童：第二次世界大戦中，男性の仕事だと考えられていたたくさんの仕事を女性が引き継いだからです。

教諭：よろしい。1920年代には労働者はそれまでにないほど多くのお金を稼ぐようになりました。これは原因です。その結果は何？　エリック。

＊アメリカの授業(2)ーアメリカ南北戦争

教諭：歴史（の事実）を知らない者として，君たちがリンカーンになったつもりでこう言ってごらんなさい。「どうすべきだろうか」と。戦争を始めるべきか，始めるべきでないか。自分たちが持っている情報を使いなさい。君たちは何を達成したいの？私たちは今，この瞬間に歴史を変えられるんだよ！

（児童に配られたタスクシートには，今何を行うべきか考え，さらに考えられうる良い結果と悪い結果を少なくとも2つずつ考えるよう指示が書かれている。）

（中略）

児童：良いことも悪いことも同じくらいの程度で起きる可能性があるので，大統領は戦争をすべきともやめるべきとも言えない。

（中略）

教諭：リンカーンは決断しなければならないんです。その時に大切なのはその理由です。何を達成しなければならないのか。自分の言葉でその理由を言ってごらんなさい。

どちらの国の教員も，「特定の価値は教えない」と答えたそうですが，日本では対象となった4人の教師すべてが，「歴史上の人物に思いを寄せることができる」ことが「歴史を理解する上でも最も大切な能力」であると答え，過去の人々に対しての共鳴・同調の感情が教師によって高く評価されます（「娘を政治の道具に使うなんて，平安時代の貴族が私には信じられません。本当にひどいです。貴族のぜいたくな生活のために働いた農民がかわいそうだと思います」，「鎌倉武士は夜も寝ないで土るいをつんで，いっしょうけんめい戦ったのに恩賞がもらえなくてかわいそうだった」（p.61））。

一方で，アメリカの教師はすべて，「分析する能力」が「歴史を理解する上で最も大切な能力」であると答えたということです。アメリカの小学校では歴史の試験にエッセイが課され，情報を取捨選択して分析し，児童が判断し決断しているものが高い評価を受けるのです。因果律では原因の特定に関心が向けられ，具体的で実現可能な目標設定をするため，「目標に至る手段や心構えの価値は問わず，達成のためにいかに行動し条件や環境をコントロールするか」に関心が置かれることになります（p.66）。

文化の違いから生ずる誤解や逆機能

研究から得られる示唆は，高校と大学のように，同じ国の中でも集団によって文化が異なる場合，私たち大学の教員が持つ説明スタイルと学生の説明スタイルの「違い」が能力の「差」として見えてしまう，ということです。つまり，学生が高校まで訓練されてきたやり方でレポートを書くと，それは私たち教員には「感想文」にしか見えず，「この学生は分析や考察ができず，能力が低い」と誤解してしまう危険があるのです。しかし，初等中等教育において，作文の指導が「起承転結」を旨とし，共感することを重要視しているとすれば，大学はこのような訓練を繰り返し受けてきた学生たちで溢れかえっていることになります。

もう一つの示唆は，「どのように起こったかを知れば，なぜ起こったかは自然に理解できる」と初等中等教育で信じられているとすれば，「どのように」を記述することが「なぜ」を説明したことと同じになり，それが「論理的な説明」として初等中等教育では受け入れられている，と考えられることです。日本の大学で求められる「論理的思考」と初等中等教育で求められる「論理的思考」は，中身が全く違いますので，大学での学びのスタートを一定水準に引き上げる意図を持って，「論理的思考を高校で教える」ことが政策決定された場合，むしろこのような共感能力と大量の情報の記述の教え込みが強化される可能性が少なくありません。そうしますと，私たち大学教員は初年次生を大学生に転換させるべく，より多くの労力をかけることになります（異文化からのシステム導入時に起こる，脱連結や逆機能とも言うべき現象で，組織論では認知されている問題です）。すべての学校段階で文化をある程度統一するのは意味のあることかもしれませんが、文化の断絶を踏まえることも、高等教育として必要なのではないでしょうか。　（文責：加藤　善子）

参考文献：
渡辺雅子（2003）『叙述のスタイルと歴史教育』三元社.
渡辺雅子（2004）『納得の構造―日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社.

活動報告　2月のFD活動について

★2月5日（火），教育著作権セミナー「大学等におけるICT活用教育と著作権」がe-Learningセンター主催，高等教育研究センター共催のFDとして開催されました。放送大学ICT活用・遠隔教育センターの尾崎史郎教授を講師に迎え，大学の教職員が知っておきたい著作権の基礎知識とe-Learningを利用した授業に著作物を利用する場合の著作権上の問題について解説をしていただきました。後半は，30分の質疑応答の時間を設け，参加者の疑問に丁寧に回答いただきました。

★2月6日（水）、松本キャンパスにおいて、教育におけるICT（情報通信技術）の活用能力を高める目的で、「eALPSで授業の質を高める」をテーマにFD講習会が開催されました。本講習会は、e-Learningセンターと高等教育研究センター共催で行われ、講師は高等教育研究センター副センター長・e-Learningセンター研究開発部門長である矢部正之教授、e-Learningセンターの長谷川理助教、メディアコーディネータの早水さんと原田さんが務めました。

▲2月15日工学部FDの様子

★2月15日（金），工学部において「GPA制度導入に際してのポイントや課題」をテーマとしてFDが開催され，高等教育研究センターの加藤鉱三教授が講師を務めました。教員87名が参加し，アンケートでは『日本式と北米式の違いと，日本式の問題点が理解できた』，『GPA制度に対する誤解が解消し，有効性が理解できた』などの感想が見られました。

★★開催報告の詳細は，高等教育研究センターのウェブサイト（http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/）**をご覧ください★★**

スタッフからひとこと

信大に来て3年が経ちました。松本と信大のローカル・ルールを学び，何をすれば喜ばれる(＝評価される)かも承知しました。自分の時間と能力を配分して仕事を達成していく速度もつかめたと思います。私の移行期間は終わり，信大の一員としてようやく適応できたのではないかと感じています。　（准教授　加藤善子）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター
■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1
■TEL：0263-37-2194（担当：学務課教務グループ）
■MAIL：campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp
■URL：http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/